

報告

中世ウェールズ宮廷騎士物語 『マビノーギ四枝』に関する翻訳研究

2000年度金城学院大学研究助成対象

2001年度財団法人国際言語文化振興財団助成対象

水 谷 宏

Hiroshi MIZUTANI

はじめに

本稿は、中期ウェールズ語で書かれた中世ウェールズの宮廷騎士物語『マビノーギ四枝』 *Pedeir Keinc y Mabinogi* を、原典から直接日本語に翻訳する上での、三つの基礎的研究の結果を報告し、そうした研究結果に基づき、いくつかの基本的な問題について論じるものである。

明治維新以後の日本の英国研究は、世界的に見ても極めて高い水準を維持し、社会各層に広く、深く影響を与えてきた事実は、多くの人々が認めるところであろう。その特徴が、主にイングランド地方に住むアングロ・サクソン系住民の言語と文化、即ち、イギリス英語とその文化の研究への偏重であったという事実も、我々は認めざるを得ない。その結果、英国社会を単一民族社会と見なす傾向が著しく、ケルト系住民、特に、英国社会の発展に大きく寄与してきたウェールズ人の言語と文化、即ち、ウェールズ語 *Cymraeg* とその文化への関心がまったくと言っていいほど、高まらなかったのである。『マビノーギ四枝』のようなウェールズを代表する文学作品の日本語訳はまったくなされなかったどころか、そのような作品の存在すら気づかずに21世紀を迎えてしまったのである。

中世の英国では、イングランド地方においては、イギリス文学の華とされる、ジェフリー・チョーサー Geoffrey Chaucer (1340?-1400) による「カンタベリー物語」 *The Canterbury Tales* (14世紀末) という優れた文学作品が残されている他、ウェールズ地方のウェールズ文学には、ウェールズのほぼ全域に及んで語部達が語り継いできたと言われる『マビノーギ四枝』 *Pedeir Keinc y Mabinogi / The Four Branches of the Mabinogi* がある。日本では、後者は前者の陰に隠れてしまい、今日まで、ほとんどの人々にはその存在すら気づかれなかった。この二つの作品は、共に、中世のヨーロッパにおいて英国の中世文学を代表する作品であり、違いは、前者が中世の英語の一変種で書かれているのに対して、後

者が中世のウェールズ語の一変種で書かれている点である。

本報告者は、そうした英国理解への偏重を少しでも改めたいとの願いから、1968年以来、「英国研究の一環としてのウェールズ学」*Astudiaethau Cymraeg fel Rhan o Astudiaethau Prydeinig / Welsh Studies as Part of British Studies* の立場から、ここに報告する三つの研究主題を中心にウェールズへの理解を深めようとする研究を続けてきた。その三つの研究主題は、以下である。

- 1) 「緩音現象」*Lenition* と呼ばれる調音音声学的特徴を中心に、
ウェールズ語に関する音声学的研究
- 2) 地名学的考察を中心に中期ウェールズ語社会、特に、「領主」
pendeuc とその周辺の「貴族達」*gwyrda* が形成した社会の研究
- 3) ウェールズの地勢・気象・土壌等の自然条件と、「領地」又は
「行政区画」との対応を示すウェールズ語方言社会の研究

こうした研究分野は、それぞれが自律性のある独立した研究主題であると共に、相互に密接に関連した分野である。本報告は、こうした研究が担っている『マビノーギ四枝』の日本語訳に深く関わる部分を扱うものである。貴重な助成を賜った「2000年度金城学院大学研究助成」及び「2001年度財団法人国際言語文化振興財団助成」の最終報告として、概要を纏める。ウェールズ学の現況は、未だ、その揺籃期にあるとの認識から、極力、簡潔で平易な記述を試み、紙数の関係上、詳細は別稿に譲り、中心的課題のみについて扱うことにする。

1. 音声学的研究主題

近年、ウェールズを訪れる日本人も次第にその数が増えてきている。ウェールズの言語や文学・文化の研究に留学する研究者も多くなりつつある。研究目的の訪問者の他にも、観光目的の訪問者も相当多いようであり、ウェールズの地名の読み方が判らず、しばしば質問を受ける機会も増えてきている。また、いろいろな記事などでも、ウェールズの地名や人名が、カタカナ表記される場合も多くなった。しかし、大抵は、英語読み、イギリス人の発音を日本語のカタカナに置き換えているものに会うことが多い。地名学的研究に入る以前に、ウェールズ語音の日本語音への「音韻翻訳」*transphonemecization* の作業から始めなければならない。

ウェールズ北西部にある町 *Bangor* の発音は、ウェールズ語では [*bangor*] だが、既に英語での使用も定着していて、日本の英和辞典にも載っている。英語読みで、[*bangə*] と発音表記され、日本語で発音する場合にも、「バンガ」と言う人が多く、このカタカナ表記も定着している。しかし、ウェールズ語として取り扱い、原音に近い表記を心がけるならば、「バンゴール」が望ましいことは言うまでもない。以下、研究社新英和大辞典（第6版 2002

年)に散見される、英語として収録されているウェールズ語の地名について、英語読みと、ウェールズ語読みとを併記して、その下にそれぞれのカタカナ表記を試みる。

	[英語式発音]	[ウェールズ語の発音]
1) Aberystwyth	[abəristwɪθ] 「アベリストウイス」	[aberəstuiθ] 「アベラストゥーイス」
2) Caernarvon	[kəɹnɑ:vən] 「カーナーボン」	[kairnarvon] 「カイルナルヴォーン」

注：この地名のウェールズ語の綴りは Caernarfon である。

3) Gwynedd	[gwɪnəð] 「ゲイナズ」	[gwineð] 「ゲイネーズ」
4) Llandrindod	[θləndrɪndəd] 「スランドゥリンドッド」	[ʎandrindo:d] 「サンドゥリンドード」

注：同辞典では、Llandrindod Wells の英名で収録し、語頭の ll-を [θl-]で発音表記している。次例参照。

5) Llanelli	[θləneθli] 「(ス) ラネ (ス) リ」	[ʎaneli] 「サネシ」
-------------	------------------------------	-------------------

注：ウェールズ語の綴りの他に、Llanelly の綴りも収録している。

さて、このように、ウェールズ語の地名の発音が、英語読みの発音からしかなされてこなかった事実を踏まえると、「カタカナ表記」の問題は、決して枝葉末梢の問題ではない。英国の国旗「ユニオン・ジャック」がいみじくも顕してきた如く、「連合王国」United Kingdom の名の下に、イングランドとスコットランドやアイルランドが合併した当時の価値観からすれば、「イングランドとウェールズとの併合法」(1536年) 'Y Ddeddf Uno' / The Act of Union of England and Wales 以後、ウェールズはイングランドの一部と見なされていたのかも知れないが、ウェールズ学的見地からすれば、たとえ、今日のように、言語的には「英語化」が、文化的にも「イングランド化」Saesnigiad / Anglicisation が益々深く進行しているとは言え、決して好ましいことではない。ウェールズ語の地名・人名の音韻翻訳においては、原音主義は守られるべきである。理由は、6世紀半ばから今日まで、ウェールズ語という言語を母語として使用しつづけてきた人達と、その文化とが英国のイングランドのすぐ隣に存在してきたという事実があるからである。

『マビノーギ四枝』の翻訳に際しても、この音韻翻訳上の諸問題は検討が必要である。四つの物語の題名には、登場する主人公の人名や、物語の重要な舞台となる地名が含まれてい

る。第一話「ダヴェードの国のご領主様プーイス様」、第二話「シール様のご息女ブラヌウェン様」、第三話「シール様のご子息マナウーイダン様」、第四話「マソヌーイ様のご子息マース様」の人名と地名とである。そこで、本稿では、「プーイス」Pwyll, 「マナウーイダン」Manawydan, 「マソヌーイ」Mathonwy の二重母音字 wy と、「ダヴェード」Dyuet の語尾の -t, 「マナウーイダン」Manawydan の語中の -d-が、中期ウェールズ語ではどのように発音されていたかについて考察を試みる。

まず、二重母音字 wy に関しては、以下の発言を参考にする。

「wy は三つの二重母音を表わし、*mwyn* ‘gentle’, *swyno* ‘to charm’ のような下降二重母音、*gwynn* ‘white’ に見られる短い上昇二重母音や、*gwyr* ‘men’ のような長い上昇二重母音、さらには、*tywynnu* ‘to shine’ のような上昇二重母音がある。」^(注1)

下降二重母音は、音声的には [u:i] と解釈されるのが一般的である。従って、「プーイス」「マナウーイダン」「マソヌーイ」の音韻翻訳が可能である。英和辞典からの例として挙げた「アベラストゥーイス」も同様である。しかし、これほどまでの原音主義は、「音韻翻訳」を通り越した、カタカナによる「音声転写」phonetic transcription であるとの批判があるならば、長音符号は「プーイス」と「アベラストゥーイス」のみに限っても差し支えはない。Pwyll と Aberystwyth の場合、「プーイス」「アベラストゥーイス」では、英語に見られる「半母音」semivowel ないしは「わたり音」glide -wi- のカタカナ表記と区別がつかない。英語では、we, win, wing, window などの [wi-] の [w-] は、「半母音」つまり「わたり音」と呼ばれている。ついでながら、上記引用中の上昇二重母音の例をカタカナ表記すれば、*gwynn* ‘white」「ゲイン」、*gwyr* ‘men」「ゲイル」、*tywynnu* ‘to shine」「タワニ」が妥当である。本報告者の体験でも、*wyth* ‘eight’, *wy* ‘egg’ を、「ウイス」「ウイ」と発音して、「ウーイス」「ウーイ」と訂正されたことがあった。

次いで、子音字 t の発音であるが、一般的に、中期ウェールズ語の子音字の使用はかなり不統一なところが観察される。「文語ウェールズ語」Cymraeg Llenyddol / Literary Welsh としての発達期に当たっていたことが推測される。『マビノーギ四枝』の正典 canon とされる写本^(注2)は、フラゼルフ Rhydderch (c.1325-c.1399) により編纂された^(注3)「フラゼルフの白本」*Llyfr Gwynn Rhydderch* (1350年ごろ) であるが、この期のウェールズ語の綴字法に関しては、以下の発言がある。

「ウェールズ語の写本でもっとも早期のものである『カエルヴァルジンの黒本』では、語尾の -b は nep のように p で表わされているが、b も時々生じ、mab もある。語尾の -g には c が生じ、guledic「領主、統治者」、そして、d には d

が生じ *nid* 「～ない」、*penyd* 「懺悔」がある。語中の [-ð] と語尾の [-ð] には *t* が生じ、*bluytin* 「年」(ModW *blwyddyn*) や *trugaret* 「慈悲」(ModW *trugaredd*)、*argluit* 「殿様」(ModW *arglwydd*) が見られる。[-ð] を表わすのに *th* が生じることも時折あり、*oeth* 「～だった」や *forth* 「道」が見られる。後の写本では、このような慣例に変化があったが、それ以前の慣例が残っており、完全に統一された体系を示す写本は存在しないのである。14世紀の綴字法上の特徴は、この世紀の初めに属する「フラゼルフの白本」(Peniarth 4 と 5)、この世紀の終わり近くに書かれた「ヘルゲストの赤本」(Jesus College MS.cxi) がよく表わしている。この期の綴字法上の顕著な特徴は、語尾の -d に *t* を用い、語尾の [-ð] には -d、語尾の -g には -c を用いることであり *diffryt*, *tynnit*, *dywawt*, *y mlad*, *y uynyd*, *redec* (RM) がある。一般的には語尾の -b は *b* で表わされ、*heb*, *mab* (RM) だが、*p* も時に生じ、*hep* が見られる。[d] と [ð] とは、語尾を除き、区別されないのが普通である。[ð] が *dd* で表わされるのは後のことであり、これは現代ウェールズ語での正規の表記となった。」^(注4)

「ダヴェードの国」*Dyuet* に限らず、語尾の [-d] は、-t と綴られるのがこの期の特徴であり、現存する写本の書かれた時期を推定する基準にもなっている綴字法上の特徴でもある。*Dyuet*, *dyuot*, *pendeuic*, *oruc*, *hep*, *marchauc*, *ac* など、語尾の有声閉鎖音を無声閉鎖音で綴る慣習が見られる事実は、中期ウェールズ語の時代においても、現代の英語の発音に見られる、語尾有声閉鎖音の無声化 *devoicing* が存在した事実を表わしているとの推論が成り立つのである。

Manawydan 「マナウーイダン」の語中の [-d-] の発音については、19世紀から20世紀初めの先達の解釈では、[-ð-] であり、印刷に際しては、*Lady Charlotte Guest*, tr. (1877) *The Mabinogion*; *John Rhys* and *J. Gwenogvryn Evans*, ed.(1887) *The Text of the Mabinogion and Other Welsh Tales from the Red Book of Hergest*; *J. Gwenogvryn Evans*, ed.(1909) *The White Book Mabinogion: Welsh Tales & Romances reproduced from the Peniarth Manuscripts*, のいずれもが、*Manawyddan* と綴っている。しかし、その後、*Ifor Williams* (1927) 'GENERAL NOTES, *Manawydan*, *Golydan*', *BBCS*, Vol. III, pp.49-52.^(注5) において、当時の綴字法上の慣例では、語中の [-ð-] は -t- と綴られるのが常であり、-dd- と転写するのは間違いとの指摘があって以来、[*manauīðan*] とは読まれなくなり、[*manauīdan*] の読み方が定説となっている。従って、*Ifor Williams* 説に立脚する限りにおいて、日本語への音韻翻訳も「マナウーイダン」が妥当ということになる。

本報告者の私見では、ウェールズ語の /t, d, n/ の調音は、英語などのような歯茎音

調音 alveolar articulation ではなく、歯音調音 dental articulation であり、現実の発音としては /t/→ [θ]、/d/→ [ð] の「緩音現象」の一種として取り扱うことが出来る調音が生じる可能性は十分に考えられ、「マナウイザン」のカタカナ表記の採用も不適當とは言えない。

その他の発音では、例えば、子音 [x] の発音が、[x] だけであれば「フ」と表記できるが、bach [bax]「バッハ」、dechreu [dexrei]「デヘレイ」、Cuch [kix]「キーヒ」、coch [kox]「コーホ」、gyrrwch [gərux]「ガルフ」など、母音の後の [-x] 調音に見られる先行する母音の唇の形状の同化現象に関する問題等、重要な課題もあるが、紙数の関係で、別の機会に譲ることにする。

2. 地名学的考察と中期ウェールズ語社会の研究主題

ウェールズの中世 Yr Oesoedd Canol は、特に、ローマ崩壊後からノルマンの侵攻までの前期は、文献資料が極めて少なく不明の所が多いために、「暗黒時代」‘Yr Oesoedd Tywyll’^(注6) と呼ばれる。日本のウェールズ学にとっては、中世全体が‘Yr Oesoedd Tywyll’ と呼ばなければならない。

「マビノーギ四枝」研究の重要な課題の一つに、この四つの物語に描写されている地名についての十分な知識を得ることが挙げられよう。物語の成立や、写本の成立時期に深く関わるからである。物語そのものの成立については、決定的な資料の不足から、先達の研究成果にもかかわらず、どの説に準拠すべきか判然としないのが実状である。他方、物語に描かれている地名や行政区画（正しくは、「領地単位」と呼ぶべきであろう）に関する知識は、ウェールズ語方言の研究成果と相俟って、描写されている歴史的事実と思われる出来事の解釈に役立つ。

まず、Davies, W.(1982) と Chadwick, N.(1970) の発言に基づき、この物語の背景となっている中世ウェールズの社会構造を理解する上で、土地領域 dosbarthiad tiriogaethol / territorial classification を示す語 1) tyrnas 2) gwlat 3) cantref 4) cymut 5) maenor の相互関係を明確にし、さらには、方言調査の成果、特に、Wade-Evans, A,W.(1905, 1906); Thomas, A.(1973); Thorne, D.(1984) の発言に見られる、「方言境界と行政区画ないしは土地領域の対応関係」の問題に検討を加え、基本的には、日本の律令制の地方行政区画とされる「国郡里制」との対応を求めて、1)「王国」2)「国」3)「郡」4)「里」5)「荘園」等の訳語を当てることの妥当性を見極めたのであった^(注9)。

次いで、第一話「ダヴェードの国のご領主様プーイス様」の「主な宮廷がある」とする「アルベルス」の所在に関しては、ペンヴロ州 (Sir Benfro) の南部にある現存す

る「アルベルス」Arberthでは猟場までの距離が余りにも遠すぎるとの疑問に対して、1886年^(注7)と1953年^(注8)にいくつかの詮索がなされて以来、現地においても論じられることは、まったくなかったのである。本報告者は、1983年から1986年にかけての現地調査と、1993年度の現地調査での結果を踏まえて、物語に描写されている「フリアノンに課せられた償い」の情景と、ウェールズ人の築城とされる裏山の古城の位置関係等から、「ナンハヴェル村」Nanhyferを物語に描かれている「プーイスの主な宮廷の所在地」とし、また、「ペン・スーイン・ディアルヤ」Penn Llwyn Diarwyaは「アベル・キーヒ村」Aber Cychの西約半マイルの地点にある「ペンウェルンジ」Penwernddu(現在は農場の名前となっている)とする説を、Syr John Rhys (1886); Richard, M.(1964); Samuel, W.J.(1971)などを援用して、提唱した他、Jones, B.S.(1972)を援用して、英語地域とウェールズ語地域の言語境界 Landskerの存在にも注目し、「史実と虚構の狭間に告げられる真実」について論及を行った^(注9)。

3. ウェールズ語方言の現地調査の研究主題

ウェールズ語の方言研究は、それ自体、勿論自律性のある学問分野であり、方言学の一環として位置づけられ、ウェールズにおける諸方言の地域的特徴の詳細に関する情報を提供してくれるものである。同時に、中世から現代までのウェールズの歴史・経済・社会、そして文化に関する豊かな情報をも提供する研究分野である。この事実は、最近30年間に現地で発表された方言研究に示されている。言い換えれば、ウェールズ学の基礎研究部門として、ウェールズ語方言研究を位置づけることも可能である。

1983年以後に実施した現地ウェールズでの方言調査に基づく結果は、前述の如く、ウェールズにおいては、方言境界と行政区画ないしは土地領域とが極めて明確に対応関係を示しており、地域方言的変種と階級方言的変種の存在が明らかになる。ウェールズ人を意味する「カムロ」Cymroの語源は、「同じ地域の人」即ち「同郷、同胞」、「同一方言共同体の人々」を意味するが、直径10キロ以内の極めて狭い範囲に限られるという事実についても明らかになった。

「Parryの聖書は、1588年の聖書の改作であり、Morganの文体は修正され、『厳密な意味での純粋な文語』となった。」

‘Addasiad o Feibl 1588 yw ‘Beibl Parry’, ac ynddo cywirir arddull

Morgan pa le bynnyg y llithra hwnnw “oddi wrth burdeb caeth yr iaith llenyddol.” (Davies, J. 1990, Hanes Cymru, t. 233.)

と言われ、聖書の翻訳がウェールズ語の文語としての標準化の確立に役立ったとされているが、「マビノーギ四枝」の写本の成立も、文語ウェールズ語 Cymraeg llenyddol

への道をつけるのに役立ったのである。即ち、語部の「話し言葉」Cymraeg llafar の特徴への「消極的関心」^(註10)は、中期ウェールズ語期に書かれた多くの写本の時代に、既に「方言的特徴のほとんどない、ほぼ標準的書き言葉の文語が存在していた」^(註11)のであった。

ウェールズ語方言は南北に大別され、「マビノーギ四枝」に用いられている変種は、南部方言に近いとは言うものの、方言的特徴により語部や筆耕の出身地を同定することは難しい。しかしながら、「選ばれた貴族や地主階級の聞き手を相手とした言語上の統一」^(註12)の発言の見る如く、「領主」pendeuc とその周辺の「貴族達」gwyrda が形成した社会の情報を与えてくれるのは間違いない。

注：

- 1) Morris-Jones, J.(1913:38) 2) Huws, D.(2000:13) 3) Huws, D.(2000:89)
- 4) Evans, D. Simon (1964:7) 5) Williams, I. (1927:49) 6) Davies, J.(1990:44)
- 7) Rhys, J. (1886:149-153) 8) Gruffydd, W.J. (1953:18) 9) 水谷宏 (1994); 水谷宏 (1995); 水谷宏 (2002b) 10) 水谷宏 (2002a) 11) Huws, D. (2000:55)
- 12) Thorne, D.A. (1994:265)

参考文献

- Chadwick, N. (1959) 'The Welsh Dynasties in the Dark Ages', *Wales through the Ages*, ed. by Roderick, A.J., 49-59, Llandybie: Christopher Davies.
- Chadwick, N. (1970) *The Celts*, Harmondsworth: Penguin Books.
- Charles, B.G.(1992) *The Place—Names of Pembrokeshire*, vols. I & II, Aberystwyth: National Library of Wales.
- Charles-Edwards, T.M.(1970) 'The Date of the Four Branches of the Mabinogi', *Transactions of the Honourable Society of Cymmrodorion*, 263-98.
- Davies, J. (1990) *Hanes Cymru*, London: Penguin Books.
- Davies, W. (1982) *Wales in the Early Middle Ages*, Leicester: Leicester University Press.
- Evans, D. Simon (1964) *A Grammar of Middle Welsh*, Dublin: Dublin Institute for Advanced Studies.
- Gruffydd, W.J.(1912-13) *The Mabinogion*, London: Honourable Society of Cymmrodorion.
- Gruffydd, W.J.(1928) *Math vab Mathonwy, an inquiry into the origin and*

- development of the Fourth Branch of the Mabinogi with the text and translation*, Cardiff: University of Wales Press.
- Gruffydd, W.J.(1953) *Rhiannon, an Inquiry into the First and Third Branches of the Mabinogi*, Cardiff: University of Wales Press.
- Gruffydd, W.J.(1958) *Folk and Myth in the Mabinogion*, Cardiff: University of Wales Press.
- Huws, D.(2000) *Medieval Welsh Manuscripts*, Cardiff and Aberystwyth: University of Wales and National Library of Wales.
- Jones, B.S.(1972) 'Linguistic Significance of the Pembrokeshire Landsker', *Pembrokeshire Historians*, 4:7-29.
- 研究社「新英和大辞典」(第六版) 東京: 研究社
- King, D.J. Cathcart (1981) 'The Old Earldom of Pembrokeshire', *Pembrokeshire Historians*, 7:4-15.
- Mizutani, H. (1994) 'An Interpretation of the Mabinogion from the Viewpoint of Dialects', Lecture at the Honourable Society of Cymmrodorion, 15th March, 1994.
- 水谷宏 (1995) 「マビノーギの解釈: 『ダヴェッドの王子』の方言と地名の考察——史実と虚構の狭間に告げられる真実——」(1994年11月12日 明海大学浦安キャンパスにて開催された第14回日本ケルト学会議口頭発表3)
『第14回日本ケルト学会議会議報告』6-7, 東京: 日本ケルト学会議事務局
- 水谷宏 (2000a) 「マビノーギ研究覚え書き 第一話『ダヴェッドの領主プイス』(その1)」『金城学院大学論集』(英米文学編) 第41号 (通巻第184号) 277-295.
- 水谷宏 (2000b) 「マビノーギ研究覚え書き第一話『ダヴェッドの領主プイス』(その2)」『金城学院大学人文・社会科学研究所紀要』第3号 1-12.
- 水谷宏 (2001) 「南北方言の諸特徴と地域的変種への消極的関心」『金城学院大学論集』(英米文学編) 第41号 (通巻第189号) 313-329.
- 水谷宏 (2002) 「ダヴェッドの領主プイスの居城に関する地名学的考察」『金城学院大学人文・社会科学研究所紀要』第4号 47-58.
- Morris Jones, J.(1913) *A Welsh Grammar, Historical and Comparative*, Oxford: Clarendon Press.
- Rhys, Sir John (1886) 'Enwau Lleoedd', *Anerchiad y Llywydd i Eisteddfod y Castell Newydd Emlyn, Cymru*, (Rhyf 63): 149-153.
- Richards, M. (1964) 'The significance of IS and UWCH in Welsh Commote and

- Cantref Names', *Welsh History Review*, 2:9-18.
- Richards, M. (1969) *Welsh Administrative and Territorial Units*, Cardiff: University of Wales Press.
- Samuel, W.J. (1971) 'Ancient Law of Dyfed', *Pembrokeshire Historians*, 3:42-52.
- Thomas, A.(1973) *The Linguistic Geography of Wales*, Cardiff: University of Wales.
- Thomson, R.L. (1957) *Pwyll Pendewic Dyuet*, Dublin: Dublin Institute for Advanced Studies.
- Thorne, D. (1984) 'The Correlation of Dialect and Administrative Boudaries in Wales: a Review', *Welsh Phonology*, Cardiff: University of Wales Press.
- Thorne, D. (1994) "'Tafodieithoedd Datguddiad Duw": the change in the voice of the Welsh Bible', *The Changing Voices of Europe*, eds. M.M. Parry, W.V. Davies and R.A.M. Temple, Cardiff: University of Wales Press, 265-279.
- Wade-Evans, A.W. (1905) 'Carmarthenshire Dialects', *Carmarthen Antiquarian Society Transactions*, vol. I:57.
- Wade-Evans, A.W. (1906) 'Fishguard Welsh (Cwmrag Abergwaun)' *Transactions of the Guild of Graduates of the University of Wales*, 1906, 21-27.
- Williams, I.(1927) 'General Notes **Manawydan, Golydan**' *The Bulletin of the Board of Celtic Studies*, vol. III:49-52, Cardiff: University of Wales Press.